

ゆきぎのみち

日本古神
道研究会

皇紀二六六三年四月五日 横浜定例講演会より

『日本人は勤勉な民族 (二)』

尊徳さんの 師 最近では、学校でも見かけな
生き方を学ぶ くなりましたけれども、私達の小学
校時代には、尋常小学校とか国

民学校と言っていました。その当時には校門を入りますと、正面に二宮金次郎の、いわゆる薪を背負って、本を読みながら歩いている二宮尊徳さんの銅像があつて、私の通った学校の場合には入って右手の所に楠正成公の銅像がありました。どこの学校においても楠正成公の銅像と二宮金次郎、尊徳さんの銅像がありました。

二宮金次郎さんの場合には、幼くしてご両親を亡くしましたので、弟達もそれぞれがばらばらに親戚に引き取られ、金次郎さんの場合には、荒地に稲の苗の残ったのを植えておく。そうすると、小さいものであつても、それを積み重ねていく事によって大きなものになるといふことで「積小為大」と言ふそうですが、そういった荒地の所であつても、その残った

二宮尊徳 (金次郎) 像

二宮金次郎がここにいる (<http://www.ai-trip.com/trip/kinjiro/>) より



楠正成公の銅像 平成 15 年 6 月 14 日 皇居前にて撮影



苗を植えていくと一俵以上のお米が取れた。田畑としてきちつと登録されているものについては、年貢を納めなければならぬけれども、そういう田んぼとして登録されていない荒地の所に植えたものは、そのまま年貢米を納める事なく、全てが金次郎さんのものになった。

そして伯父さんの家に預けられている時に一生懸命勉強しようと思つて勉強していると、その灯油という、昔は菜種油をお皿のようなものに入れて、芯を通してそこに火をつけていたものですから、その菜種油が非常に高価なものであつたので「金がかかる」と言つて叱られる。そうすると、菜種を土手に植えて、その菜種を取つて油に変えて勉強された。また自分で木箱を作つてその中

に砂を入れて、その砂の上に自分で文字を書いて勉強をするという事をされた。

この点は、私の場合なら大宇宙へ向かって大きく書けばいいのになと思うのです。そうすると消さなくて済む。砂は消さないと次の字が書けませんけれども、大宇宙に書けば消さずに済むし幾らでも書ける。そういうことを思いましたけれども、しかしその金次郎さんの素晴らしい所は、小田原の近くに現在もあります。酒匂川さかかわがよく氾濫をする。そういった時には、土手の復旧をする為に一軒の家から必ず一人は出なければならぬ。

出来る範囲で 人様の為

しかし、自分が出ていっても、むしろそこで邪魔になるだけ。人から見ると、本人にとっては一生懸命や

ついても、まだ大人の中ではそれ程の力が出せない。むしろ「邪魔だよ」という事を言われてしまう。その時にじつと皆さんの動きを見ながら、毎日一足ずつくらい草鞋が取り替えられているという事に気が付く。

そして自分がお家で夜なべをしなから、藁を打って草鞋を沢山作っておく。そして、「これを履いて下さい」という事を言うと、「あなたの作った草履は本当に履き心地がいいよ。また作ってくれるか?」という風になって、自分でモッコを担ぐ方では皆さんの邪魔になるかもしれないけれども、そういう自分で出来る範囲の事をしようと考えたのです。そういう工夫をして、毎日、沢山の草鞋を編んで持っていたのです。

しかも、そうして草鞋を差し上げるだけでなく、どうしてこの川が氾濫するのか、どういった所に氾濫を生じているのか、そういった事を一生懸命ずーっと見つめていく。そうすると水の流れの勢いをこういう風にしたらいいのではないか、という風な色々案が出てくる。

それは後々に非常に役に立つ発想でございませけれども、その当時としては、とりあえず家が流れてきた時に瓦屋根の場合には重くて途中で沈んだり壊れたりしているけれども、ある意味でかやぶきの屋根の場合には、ぼっかり、ぼっかり浮かんで流れてくる。そうすると、そういったものを作って、そして土手が破れそうなどころにそれをスポンと入れていけば、その後土嚢を積んでいくといいのではないか、という風な発想をして、そういったものを作るといふ事をなさっている訳です。

普通は「もう邪魔だよ、どけ」と言われたら、どいてしまつて、終わりになつてしまつてしまつて、じつと皆さんの動きを見ながら、片や草鞋を沢山編んでくる。そうして片一方では「何故、洪水が起こるのだろうか。それに対してどうしたらいいのだろうか」ということで、分かりやすく言えばその屋根の形をしたものをスポンと土手にはめ込んでおいて、そこに土嚢を積んでいくという形で水を食い止めたといふ事です。

創意工夫を しにくい時代

ですから、自分で出来る範囲の事をさせて頂く。この精神が大事ではないかと思うのです。私達は今、子供さん達が、家族の一員として何をしておられるだろうか。昔なら、新

聞を取りに行くとか、牛乳を取りに行くとか、小さい子供さんであつても玄関の所からそれを持ってくるだけでも、一つの家族の一員としての役目という事をした訳ですけれども、その家族の一員として出来る範囲のお手伝いという事が今は殆ど行われていないのではないか。

ある意味で恵まれ過ぎていっているというか、そういった意味で昔の様な創意工夫をするという事が非常に難しい時代になったのではないかという気も致します。

私が中央大学に入った時に、食堂に行つて驚いたのは、皆さんが「総長をくれ、総長をくれ」と言っている。一体、「総長をくれ」とは何の事かと思つたのです。総長のお名前が「林頼三郎（はやしらいざぶろう）」というので、「ハヤシライス」の事を「総長」と言っていた。「総長をくれ」というのは、ハヤシライスの事でしたが、学生はこの総長を尊敬と親しみを込めてこのように言っていたのです。

この「林頼三郎」というお方は、昔の大審院長、今の最高裁判所の長官。そして司法大臣、今で言えば法務大臣。そして検事総長。いわゆる裁判とか法律に関する三つの要職の全てをなさられたお方です。当時は東京帝国大学が君臨しておりましたので、そういう要職は全て東京帝国大学出身者でなければさせてはもらえないとされていたにも拘らず、この林頼三郎という人は、中央大学出身でありながら、その三つを全てなさられたというお方でございます。この方は大変な苦学生でございまして、書生として弁護士

さんの所で勉強をされたのですが、裁判所に行くとは帰つてこない。弁護士さんが心配して迎えに行く、途中で街灯のある所でしかも前に樹木がある所でじいっと本を読んでいた。本人は足だけ動かしているけれども、前には進まない。木があるから進めない。そういう状態で、勉強をされたという逸話のお方です。

したがって、この方が総長をしている時は、中央大学は常に東
京大学を抜いて、しかも四百人中の二百三十人余り、毎年合格者
を出す、という時代でございました。その方は自分が苦学をした
からという事で、中央大学は当時としては、大変学費も安かつた
のです。

いわゆる苦学生、優秀な者がそういう経済的な理由で勉強でき
ないといけないということで盛んに経営面においても自分の苦学
生時代の事を思い出してなされました。この時代に当時として
は、三角定期というような事を私達もさせて頂きましたけれども、
そういう風な方が今は大変少なくなつたのではないかと思ひます。

【大審院長・検事総長・司法大臣】

大審院長：現在の最高裁判所の長官にあたる。大

審院は明治憲法下で最高の司法裁判所であつた。

検事総長：最高検察庁の長。最高検察庁の庁務を

掌理し、かつ全ての検察庁の職員を指揮監督する。

司法大臣：司法行政を取り扱う中央官庁であつ

た司法省（現在の法務省）の長官。